

眠から覚めた軍艦旗

8月4日 NHK—TVにて、記念艦「三笠」の軍艦旗（旭日旗）が米国から里帰りするとのニュースが放映された。敗戦で横須賀に進駐した米軍兵士が「三笠」で手に入れてこれまで持っていたものを返却したいとの意向に基づくと由である。

敗戦直後の「三笠」は占領軍が艦装を全て解体破棄し、その跡がダンスホールとなり見るも無残な有り様で、そのどさくさに軍艦旗をくすねられても判らない混乱状況であった。

旧日本軍の将校ですら、軍が解体されて無管理状態となったのを好機として、本土決戦のために大量に備蓄されていた貴重な軍用物資をいち早く隠匿し、闇市で売りさばいて大金となった輩が続々と生まれた忌まわしい時代であった。

日本人は危機に望んでも略奪はしないなどという俗説は、当時を知らぬ平和に生きる種楽トポの楽観論で、隠匿物資の出処は略奪以外の何物でもなかった。

元米軍兵士のしたことも明らかに軍紀に反する犯罪であろうが、この度返却しなくなった動機がはたして自責の念に駆られた結果か否かは不明である。

然し、もしこの軍艦旗が日本人の手に渡っていたら、当時の旧軍隊に関するものは全て否定された環境下（占領軍の自虐史観政策）にあっては、廃仏棄却の二の舞いで軍艦旗などはおそらく破棄されて影も形もなくなっていた可能性が高いと推測される。

従って、かえって米国で保管されてきたことは僥倖であったと好意的に見ることも出来よう。

いずれにせよ、「三笠」の旭日旗の現物が里帰ることは喜ばしい限りである。惜しむらくは、もっと早くこれが返却していたら、すでに海外に入った多くの軍艦旗が



三笠保存会資料より